別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　三倉康博

本論文『初期近代スペインにおけるオスマン帝国の表象――16 世紀半ばから 17 世紀半ばにかけて――』は、副題に示された約一世紀の間にスペイン語で出版ないし執筆されたオスマン帝国をめぐる七つの作品に焦点を当て、スペイン語作家たちが当時のオスマン帝国をどう捉えていたか、またその捉え方が一世紀の間にどのように変化したかを考察したものである。取り上げられた七つの作品には、歴史記述的作品もフィクションの文学作品も含まれる。全体は「序説」と「結論」を別にすれば、「第 I 部」全二章、「第 II 部」全三章、「第 III 部」全三章の三部構成をとる。

問題の所在と研究の目的・方針を示した「序説」に続き、第 I 部「15―17 世紀のヨーロッパおよびスペインにおける、オスマン帝国への関心」では、第 II 部以降で分析されるスペイン語テクストの比較対照項として、スペイン以外のヨーロッパ地域でオスマン帝国がどのように表象されていたのかが論じられる。オスマン帝国の強大化に伴い、ヨーロッパ諸国ではこの帝国への脅威と関心が高まったが、その情報集積・発信の中心地が当初はイタリアであったこと、16 世紀中葉以降ハンガリー、フランス、フランドルなどの出身者の著作が現れるようになること、こうした著述家の中にはオスマン帝国を実際に訪れた者もいれば、帝国を見ることなしにさまざまな先行文献や情報を再編・加工した者もいたことなどが指摘され、さらにヨーロッパの著述家たちは、オスマン帝国とトルコ人について、軍隊の勇猛さ、刑罰の過酷さ、能力優先主義（メリトクラシー）、宗教上の多元性ないし寛容さ、信心深さ、勤勉さ、イスラーム信仰への批判、暴力性・残酷さ、文化・学術上の停滞といった事柄を共通して記述していたことが明らかにされる。

第 II 部「スレイマン 1 世（大帝）時代のオスマン帝国とスペイン作家たち――二大帝国の対峙の中で」では、スレイマン 1 世在位中の 16 世紀中葉にスペイン語で書かれた三つの作品が、それぞれ一章を費やして分析される。その三作品とはすなわち、バスコ・ディアス・タンコ・デ・フレヘナルのオスマン王朝史『忌まわしく残忍な民トルコ人に関して語られてきたことの集成』（1547）、ビセンテ・ロカのオスマン帝国事情報告『トルコ人の起源と数々の戦争の歴史』（1556）、およびジャンル混淆的な対話篇で作者不詳の『トルコへの旅』（1555-57 頃執筆）である。分析の結果、三作品に共通して見られる要素として、いずれの作品もオスマン帝国を描いた先行文献に相当程度依拠していること、スルタンが専制的に支配するオスマン帝国の軍事力やその他いくつかの長所を認めたうえで、トルコ人を文明とは相容れない暴力と破壊の民、ヨーロッパが打ち負かすべき敵と見なしていること、新大陸にまで領土を獲得した当時のスペインとオスマン帝国を世界に並び立つ二大帝

国と捉え、オスマン帝国との戦いにおける特別な役割をスペイン国王とその軍隊に与えていること、などが導き出される。一方、三作の間、ことにビセンテ・ロカの『歴史』と『トルコへの旅』の間には顕著な相違点もあることが指摘される。すなわち、『トルコへの旅』ではトルコ人の信仰、倫理、社会生活に関して、ビセンテ・ロカの作よりも好意的な見方が目立ち、宗教上の寛容さが浮き彫りにされる。対して、ビセンテ・ロカの作ではキリスト教を抑圧するイスラーム教徒の姿が徹底的に強調されている、という指摘である。『トルコの旅』でトルコ人が肯定的に評価されている点に、三倉氏はヨーロッパの偏狭なキリスト教社会に対する作者の間接的な批判を読み取り、この批判をエラスムス思想と関連づけている。

第 III 部「変容するオスマン帝国とスペイン作家たち」では、スレイマン 1 世以降の時代、16 世紀末から 17 世紀前半にかけてスペイン語で著された四つのオスマン帝国関連作品が検討される。スレイマン 1 世の治世が終わるとオスマン帝国の政治的実権は、スルタンから軍人政治家やハレムの女性たちの手に移り、この帝国はペルシアとの戦争や国内の反乱に疲弊し、ヨーロッパに対する軍事的脅威ではなくなってゆく。こうした帝国の変容が、取り上げられた四つの作品に相異なる形で反映していることを三倉氏は示す。具体的には、オタビオ・サピエンシアの事情報告『トルコに関する新論述』（1622）では、軍隊の衰退ぶりや官僚の腐敗が描かれ、帝国の「弱体化」が強調されていること、ミゲル・デ・セルバンテスの戯曲「偉大なるスルタン妃」（1616）とロペ・デ・ベガの中編小説「名誉ゆえの不幸」（1624）では、オスマン帝国は強大さと繁栄を維持しているものの、スルタンを意のままに操る寵妃が登場し、帝国の権力構造における変化が示唆されること、そして、無学な少年の率直な印象を伝えるディエゴ・ガラン・エスコバルの回想録『虜囚生活と苦難』（1626-48 頃執筆）では、オスマン帝国とスルタンは 16 世紀と同様の権勢と威力を誇っていること、このような点が明らかにされる。異教に対するこの帝国の態度に関しては、オタビオ・サピエンシアとディエゴ・ガランが不寛容や抑圧を強調するのに対し、セルバンテスとロペ・デ・ベガはキリスト教徒を受け入れる開放的な社会を描き、モリスコ（キリスト教に改宗したモーロ人）を追放した当時の閉鎖的なスペインと対比している、という主張がなされる。また、スペインとオスマン帝国を世界の二大帝国と捉える発想については、シチリア出身のサピエンシアを除く三者がこれを共有したが、セルバンテスとロペ・デ・ベガには融和的な姿勢が窺われて、もはや敵愾心が失せていることが論じられ、16 世紀の著述家たちとの違いが明確にされる。

ここまでの議論を踏まえつつ、「結論」では以下の点が確認される。すなわち、オスマン帝国の変容をスペイン語作家たちがさまざまな形で映し出していること、個々の書き手のオスマン帝国との関係や価値観が、この帝国の諸相に評価を下すうえで大きくかかわっていること、スペイン作家に特徴的な要素として、スペインとオスマン帝国を二大帝国と捉える意識があること、である。

本論文の意義は、次の三点にまとめられる。

第一に、本論文が、本格的な研究が始まってからまだ日の浅い領域に踏み込み、従来の研究の欠落を補っている点である。初期近代のスペインとオスマン帝国の関係は、政治面・軍事面に関してはそれなりに重要な研究対象となってきたものの、オスマン帝国が当時のスペイン人にどのように認識され、文書の中に表象されていたのかといった問題は、等閑に付されてきた。これまでになされた少数の研究はいずれも、オスマン帝国について記述したスペイン語文献を網羅的に列挙しただけのものであり、いくつかの作品を厳選したうえでその構造や細部を綿密に分析するという三倉氏の手法とは違う行き方を採っている。その意味で、本論文は国際的な観点からも、この研究領域の最先端に位置していると評価できる。

第二に、本論文がスペイン語で執筆されたオスマン帝国関連作品のみならず、同じ時代に他のヨーロッパ諸語で書かれた同種の作品にまで分析の対象を広げ、これらとの比較においてスペイン語作品の特色を明らかにし得た点である。こうした達成は、多言語にわたる卓抜した語学力をもって初めて可能となるが、実際本論文では、16 世紀の大部で難解なイタリア語文献、フランス語文献をはじめ、現地の図書館や書店で蒐集された膨大な写本資料、刊本資料が丹念に読み込まれ、存分に活用されている。原文の引用が、達意で正確な日本語に訳されているのは言うまでもない。

第三に、本論文が文学研究に歴史研究を接続する意欲的な試みであるという点である。本論文ではセルバンテスやロペ・デ・ベガといったスペインの文豪のフィクション的な作品が何点か扱われ、文学的な読解が施されているが、その一方でブローデルなどの歴史研究の成果が随所に取り入れられ、そうした読解の支えとなっている。本論文で得られた知見は、歴史研究への貴重な貢献ともなるものである。

一方、審査の席上ではいくつかの問題点も指摘された。第一に、「結論」部分が各章で述べられた事柄のまとめに終始しており、それらを改めて整理・統合し、より高い次元の結論に導く努力が不足していたこと。第二に、引用されたテクストに対する執筆者の注解や評価が必ずしも充分ではないこと。第三に、ヨーロッパ世界対オスマン帝国という国際関係の中にスペインの事例を位置づける巨視的な観点が欲しかったこと、である。しかしこれらの問題点は、本論文の画期的な価値を損なうものではない。

したがって、本審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。